

# 家庭学習応援だより

## 第9号

先日、県下一斉に学力診断テストが実施されました。気になる今年度の結果については、次号でお知らせしたいと思います。

さて、よく3学期は「まとめの学期」と言われます。とはいえ、「まとめ」だからと言って復習中心に授業が進められるわけではありません。3学期に新たに学習する内容はたくさんあります。例えば、算数なら1年生は「時間」、2年生は「分数」、3年生は「□を使った式」、4年生は「小数の計算」、5年生は「速さ」、6年生は「比例と反比例」など、大事な単元を扱います。学力診断テストが終わったからと言って、家庭学習をおろそかにせず、今年度学んだものは今年度のうちに習得できるようにすることが大切です。

### ゴールデンエイジ



子どもの運動能力が発達するゴールデンエイジがあることはよく知られた話で、ある期間に体の動かし方を覚えると、その分だけ運動能力が向上していくことがわかっています。では、学習面にはゴールデンエイジはあるのでしょうか。

脳の機能の大部分は3歳までに発達すると言われています。つまり、いかにその期間に、脳に刺激を与えられるかがポイントになります。「そんな時期はとっくに過ぎてしまった」と思われるかもしれませんが、しかし、脳の働き自体はその時ではなく、のちの使い方によって、より脳を効率的に動かせるようになるということが知られています。特に、小脳の応用能力を発達させる部分は、運動のゴールデンエイジと同時期に発達します。これが第2期ゴールデンエイジと言われる時期で、小学校中・高学年3～6年生にあたります。この時期脳はすでにある程度できあがっている段階なので、いかに脳が持つ様々な神経無駄なく効率的に動かすかによって、学習能力の向上が見込まれます。

ただ、この時期に刺激を与えることは容易ではないようです。すでに子どもは様々な場面の経験をしているし、学習も日常的に行われています。学校の勉強だけでは、刺激には不十分です。この時期の学習は机上だけにとどまりません。新しい空間、体験が大切になっていきます。普段の生活を続けるだけではなかなか発達にはつながらないようです。

### ゲーム時間の生活習慣への影響

子どもがゲームを時間通りにやめないで「やめなさい」といつも怒っていませんか。ゲーム時間は子どもたちの生活にどの程度影響があるのでしょうか。現時点までに明らかになっていることについてご覧ください。

#### ゲームが1時間以下

・関連は見られない



#### 1時間以上2時間以下

- ・寝つきが悪くなる
- ・昼間に眠気がある
- ・就寝が22時以降
- ・ベッドでゲームをする
- ・勉強きらいが増える

#### 2時間以上3時間以下

- ・朝食を摂らない
- ・勉強きらいがより増える
- ・だるくてやる気がない
- ・イライラする

#### 3時間以上

- ・運動をしない
- ・勉強嫌いがさらに増える
- ・ゲームのせいで学校を休む

## 読書の効果



今年度はこれまでに約50名の児童が「みんなにすすめたい一冊の本推進事業」の表彰を受けました。これは年間に50冊以上の本を読んだ児童を表彰する事業です。対象学年は4～6年生なので、4～6年生の約3人に1人が表彰を受けたこととなります。保護者の皆様にとって一見すると多いように思いますが、実はそれほど多くはありません。朝の活動の時間や授業の隙間時間で本を読んでいると、年間50冊以上は難しいことではないからです。子どもたちにとって魅力的な本に出会わないということもあるかもしれませんが、多くの人が読書の効果を知らない、あるいは効果があるとは思っていないからではないでしょうか。

ここでは、これまでにあまり注目されてこなかった読書の効果について考えてみたいと思います。好奇心と意欲が旺盛で穏やかで温かく、おっとりしているが決断は早い。集中力があり、質問力が高い。読書は、本校の児童にぴったりの活動だと言えます。読書は、脳に日常生活では手にできない、豊かな疑似体験を与えてくれます。

子どもたちの脳にとって読書は、日常体験とそう変わらずに、脳に知識化されていく「仮想体験」なのです。脳は眠っている間に、起きていた時の体験や学びの記憶を知識構造に変換しています。となると、親としてはなるべく豊かな体験を与えてあげたいところです。しかし、「アメリカ人として、大型犬と暮らす生活」、「母親が病気で、寂しがる妹を励ましながらか細い生活」など、そう簡単には体験させてあげられないものです。だから、読書で「脳の体験」を増やしてやるのです。

中でも、ファンタジーは子どもたちに鮮烈な体験を与えてくれます。例えば、「ハリー・ポッター」が、忍耐力と責任感で、子どもの代わりに凛々しく戦ってくれるわけです。子どもの脳は、その読書体験を夜眠っている間に知識や知恵やセンスに変え、痛い思いをせずに、責任とは何かを知るのです。本は、日常体験をはるかに超えたセンスを子どもたちの脳にもたらしてくれるありがたいアイテムです。

### 【おわりに】

「ほめて育てる」日本の家庭教育ですっかり定着したこの言葉。いまだ半信半疑の方も多はず、ここではこのモヤモヤをスッキリ解消したいと思います。「マシュマロ・テスト」を聞いたことがあるでしょうか。子どもに先のことを考えて目の前のお菓子をすぐに食べるのを我慢することができるかどうかを試し、その後40年にわたって被験者を追跡調査したアメリカの社会実験です。これまでに本お便りで何度も触れてきた「非認知能力」が育っているかどうかをみるためのものであります。

子どもの心を傷つけないように、いい気分させてあげられるようにと、子どもを甘やかし、ほしいものを何でもすぐに与えてしまうようでは、欲求不満に「耐える力」は身につかず、思い通りにならないとキレたり心が折れたりしやすくなるそうです。

アメリカの教育家ノルトによる『子どもが育つ魔法の言葉』(石井千春訳、PHP文庫)は、日本ではほめて育てることを説くものとみなされがちですが、ほめて育てるというよりも、言葉でほめることをしながらも、愛情をもって厳しくしつけることが大切だと説いています。たとえば、子どもがだれかを傷つけたり、わざと物を壊したりしたときは、「まず『そんなことになると分かっていたら、許さなかった』と、子どもにきっぱり言うべきで、なぜそんなことになったのかを考えさせ、自分の行為を恥じさせ、反省させ、ときには同じ失敗を繰り返さないように罰を与えることも必要でしょう」とアドバイスしています。

また、ルールや約束事を例外なく守らせるという欧米流の子育ての基本も説かれ、「家庭内でルールを守らせるということは、子どもが社会の一員として生きてゆく上で、とても大切なことです」、「いちばん大切なことは、親の同情を引けばわがままをとおせるのだと子どもに思わせないように注意することです」というように、子どもに歩み寄りしがちな日本の親とは正反対の姿勢を推奨しています。

今では「ほめて育てる」「叱らない子育て」が広まり、「自己コントロール力」を鍛えてくれる親は圧倒的な少数派になってしまいました。その結果、子どもたちの「自己コントロール力」の未発達がさまざまな問題を引き起こすこととなったのではないのでしょうか。保護者の皆様は、どのようにお考えですか。